ラテン語文法訳読と母語教育
――ジョン・ブリンズリー『ルードゥス・リテラリウス』と17世紀イギリスの英語教育――

鶴　見　良　次

模範的散文家として知られるローマの雄弁家・政治家キケロは、ラテン語教育をカリキュラムの柱としていたイギリスのグラマー・スクールにおいて、テキストとして最もよく読まれた作家の一人である。しかし、1611年に出版されたキケロ書簡集の英訳には、古典文学の英訳が「多様な言葉を知り、多くの言葉や表現を覚え、英語を適切に、美しく、見事に話し、書く」練習の格好の教材であることが匿名の訳者によって謳われている。「英語に固有の、適切で美しい表現を、教師は、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語などの表現と同じように、常にできるだけたくさん示し、教え、覚えさせ、練習させ、身につけさせるべきである」という。[1]同書は、ラテン文法の知識を生かして、ラテン文学を英語へ逐語訳（verbal translation）することによって、英語表現を学ぶことを目的とした読本である。この書から、ラテン語教育を範としつつ開始された初期の英語教育法を知ることができる。

現在でもイギリスの中等学校の種別として名を残す「グラマー・スクール」という言葉は、14世紀以降、はば広い中間階層の子供たちに、無償あるいは奨学金によって、おもにラテン文法の教育を行う寄付基金立学校のことを指して用いられた。聖職者養成のための教育機関でもあったが、16世紀のヘンリー８世による宗教改革以降は、世俗的な性格の学校も多く設立されるようになった。これらの学校では、よく知られるように、ラテン語をはじめ、ギリシャ語、ヘブライ語などの古典語の文法がカリキュラムの中心であった。特にラテン語は、学術、専門的職業、交易などにおいてヨーロッパで共通して用いられた言語であり、階層の高い者たちの教養の証しとなるものであった。英語はカリキュラムに含まれていなかった。たとえば、16世紀初頭に設立されたサマセットのブルートン校の設立証書には、古典の「文法を学ぶために必要な場合

以外、生徒に英語のリーディングを教えてはならない」という一節が見られる。[2]したがって、グラマー・スクールにおけるヴァナキュラーな言語である英語の教育の歴史は、上の逐語訳用の読本の例からもわかるように、ラテン語教育との関わりにおいて考察されなければならない。

グラマー・スクールにおいて、母語教育の必要性が訴えられるようになり、教科としての英語がそれ自体として成り立つようになるには、相応の期間が必要であった。17世紀以降、カリキュラムは、古典語中心から、英語を含む現代的な教科を含むものへと徐々に変更されるようになる。[3]英文法は、ラテン文法習得のための基礎知識として学ばれたが、その一方で、母語としての英語自体が科目としての独立した位置を獲得してゆく。本稿では、この時期のグラマー・スクールにおける基本的な英語教授法であったラテン語文法訳読法について、それが最も体系的に説かれているジョン・ブリンズリーの『ルードゥス・リテラリウス』(1612)[4]（ラテン語の表題は、英語の副題にあるように「グラマー・スクール」の意）を中心に検討する。それによって、ラテン語教育から派生し、発展したと考えられる側面を持つ初期の中等英語教育について考察する。[5]

I

17世紀までのグラマー・スクールにおいて、ラテン語の学習と英語の学習とはどのような関係にあったのだろうか。そのことを見るためには、グラマー・スクールにおいてラテン語がどのような方法で学ばれたかを素描する必要がある。特に、英語教育との関係で考えるには、そもそもラテン文法はラテン語で書かれた文法書で学ばれていたのか、それとも英語で書かれたもので学ばれていたのかを見なければならない。[6]

最初の英語によるラテン文法書が出されたのは1481年であり、オックスフォードのシアドール・ルードによるものとされる。その後16世紀中葉までは、多くのラテン文法やその他のラテン語教則本が英語で書かれ、出版されていた。すなわち、この時代には英語で書かれたラテン文法書で学ぶことが一般的であった。ラテン語教育において大きな変化が生じたのはヘンリー８世の時代である。それ以降数十年の間、ラテン語はラテン語で学ぶものとされたのである。このことは、ラテン語で書かれた

ウィリアム・リリー（William Lily）の『小文法入門』[7]の登場とその規範化に大きく関わる。同書中、８品詞を解説した序文は英語で、文法そのものはラテン語で書かれていた。リリーによって1510年頃に最初の版が印刷されて以来、ジョン・コレットやエラスムス等によって1540年頃まで改訂が行われた。1548年にエドワード６世によって、同書はグラマー・スクールで用いられる規範的なラテン文法書として指定され、それ以外の書でラテン文法を学ぶことは禁じられた。

しかし、17世紀に入ると、英語でラテン語を学ぶという以前のかたちが復活し、再度一般化してくる。ラテン語を少ない労力で、より短い期間に習得するべく、英語で書かれた文法書を用いて学ぶことが容認されるようになった。リリーの文法は、17世紀にいたるまで、さらに何人かの編者によって加筆・改訂されるとともに、1660年に始まる王政復古時代までには、そのほぼすべての内容が英訳された。17世紀を通して、英語はあらためてラテン語を学ぶための媒体としての機能を果たすようになっていたのである。

II

先に見たキケロ書簡集の訳者が示した学習法は、ラテン文学をテキストとして、ラテン文法の知識をもとに、正確な英訳を行うというものであった。同書には「若者に文法を教えるための指導法と逐語訳読の効用と利点に関する論説」が付され、ラテン文学の英語への逐語訳が語学学習の基本的方法として推奨されている。英訳自体を模倣し、表現力をつけるだけではない。ラテン文学の洗練された表現を逐語英訳することで、「英語に固有の、適切で美しい表現」を身につけるのである。英語教育は本来英語で書かれたものではないものを、その模範的表現の教材として用いていたのである。

実は、このようなラテン語の文法訳読（grammatical translation）自体は、ラテン語習得の方法としてすでにリリーのラテン文法の1546年の版以降に付された「読者へ」と題された巻頭言でも推奨されている。語形変化や動詞の活用などを勉強したなら、次に「文法規則をしっかりと理解し、すばやく身につけるために」「英語の修辞法だけではなく、誠実であることや敬虔であることについての大切な教えもわかりやすく学

べるすぐれた本」を読んで文法規則を勉強すべきである、とするものである。英訳された文をラテン語の原文に戻し、それによって統語法を学ぶのである。[8]さらに、ケンブリッジの古典学者で『教師』(1570)の著者ロジャー・アスカムは、この教授法を、ラテン語を十分習得した生徒に最終的にやらせる練習として捉え、推薦した。『教師』の冒頭で著者が指示する「二重訳読」(double translation)では3冊のノートが用いられる。1冊目でキケロの英訳をさせ、2冊目でそれを再びラテン語訳させる。そして、そのラテン語訳をオリジナルのキケロのテキストと比較する。3冊目のノートに、その練習を通して理解したラテン語の所有格、訳語、同義語、反意語、句などを書き込むのである。[9]

このラテン語教授法を応用して、グラマー・スクールにおける母語の教授法を体系的に示したのが、レスターのアシュビー＝ダ＝ラ＝ズーシュ校教師ジョン・ブリンズリーである。その『ルードゥス・リテラリウス』は、グラマー・スクールにおける母語としての英文法学習の重要性を訴え、その学習法、教授法を具体的に示した書として、「英語教育の発展において画期的であった」とされる。[10]実は、キケロ書簡集の訳者はその巻末で、ラテン語を英語に訳読するという英語学習法をブリンズリーに伝えた旨記しており、二人の間には交流があったものと思われる。[11]ブリンズリーも、生徒に再度ラテン語訳、ギリシャ語訳させることを目的に、キケロの『義務について』のほか、カトー、オウィディウス、そしてイソップの『寓話』などの英訳書を学校用教科書として出版している。

『ルードゥス・リテラリウス』におけるブリンズリーの教授法の大部分はラテン語教育のそれから派生したものであった。それは、副題中の「もっぱら誰もが学んでいる［古典］文法とよく知られる古典作品による」という言葉にも明らかである。例外は、英語の説教を教材として、その要約をする学習法であった。内容をキー・センテンスによってまとめることから始め、最終学年の生徒には全文の分析が課せられた。ただし、むしろこれは宗教教育の一つの方法としての側面の方が大きく、学習の中心とはなっていない。[12]おもな学習法は、くり返し英文テキストを読む、ライティングとスペリングの練習を行う、手紙文を書く（ただし、ブリンズリーによれば、これは学校ではほとんど試みられなかった)、寓話などの物語を英語で説明する、ラテン語で示された主題を英

LVDVS LITERARIVS:
OR,

THE GRAMMAR SCHOOLE;

*SHEWING HOW TO PRO-*ceede from the first entrance into learning, to the highest perfection required in the GRAMMAR SCHOOLES, with ease, certainty and delight both to Masters and Schollars; onely according to our common Grammar, and ordinary Classicall Authours:

BEGVN TO BE SOVGHT OVT AT THE desire of some worthy fauourers of learning, by searching the experiments of sundry most profitable Schoolemasters and other learned, and confirmed by tryall:

Intended for the helping of the younger sort of Teachers, and of all Schollars, with all other desirous of learning; for the perpetuall benefit of Church and Common-wealth.

It offereth it selfe to all to whom it may doe good, or of whom it may receiue good, to bring it towards perfection.

Iohn Brinsley

χρὴ μεσσῶν θεράποντα καὶ ἀγέλον, εἴκ πόλιος δν
Εἰδείη σοφίης, μὴ φθονερὸν τε λέθειν.
Αλλὰ τὰ μὲν μῶθοις, τὰ δ' ἀλεκτρυώσι, ἄλλα δ' ποιεῖν.
Τίσφιν χρήσηται μοῦσθ' ἐπιστάμενος. *Theognis.*

Nullum munus Reipub. affere maius melius que possumus, quam si doceamus atq; erudimus iuuentutem. Cic. 3. de Diuin.

Querendi defatigatio turpis est, cum id quod queritur sit pulcherrimum. 2. de Finibus.

LONDON,
Printed for THOMAS MAN. 1612.

ジョン・ブリンズリー『ルードゥス・リテラリウス』（1612）扉

語で論述する、などであった。ラテン語学習との関係では、日ごろからリリーのラテン文法を用いることに習熟すること、ラテン語テキストの英訳練習を継続的に行うことが特に推奨された。リリーのラテン文法を用いてラテン語を文法分析し、英語に訳すのである。したがって、ブリンズリーが英語学習に用いる教材は基本的に古典文学であった。

ブリンズリーは、本編に入る前に、「文法訳読について」という解説を付け、そのなかでアスカムの教授法を紹介している。1. 何を学ぶのかを理解させる。2. 忠実に逐語訳をさせる。3. 正確に文法的分析をさせる。4. わかりやすい英語に訳させる。5. 訳した英語を再びラテン語に訳し戻させる。そしてそれを原文と比較し、違いを見させる。ブリンズリーは、この方法が、個々の生徒の訳に目を通す時間の不足や、各学年にふさわしい教材を常に与え続けることの難しさなどから、一般の学校で実践されにくいであろうことも認めている。しかし、初歩的な学校用テキストを適切に用いることで、生徒も教師もともに楽しく学び、教えることができると言う。

ブリンズリーが強調するのは、訳読における文法的な正確さであった。この文法訳読法では、英語表現としての純正さを求める以前に、まずラテン文法に照らし合わせて原文に対応する英文に変えてゆくことが求められた。「ラテン語を英語に直しながら読んでゆく。初めは文法に忠実に、次に英語としての純正さに心がけて訳してゆく。」（23頁）正確に文法的分析を行うために、ブリンズリーはすべての生徒に、‘Quis, cui, causa, locus, quo tempore, prima sequela.’（「誰が、誰に、なぜ、どこで、いつ、どういう順に」）という唄を覚えさせるべしとし、その理由を次のように説明する。

> That is, who speaks in what place, what he speaks, to whom he speakes, upon what occasion he speaks, or to what end, where he spake, at what time time [*sic*] it was, what went before in the sentences next, what followeth next after. This verse I would have every such schollar to have readily ; and alwaies to thinke of it in his construing. It is a very principall rule for the understanding of any Author or matter whatsoever. (p. 123)

すなわち、このような主語、副詞相当語句、目的語、文脈などの確認作業をへて、文法的に正しい語順に言葉を並べる。意味的に、また文法的に原文に反するところがないかを確認し、最良の訳となるまで文を整えるのである。その意味で、ブリンズリーにとっての英語学習は、文法知識の習得の結果として英訳が可能になるとする文法主義であった。「まず語形および文法の知識を十分につけ、その後に正しい意味のとり方の練習と初歩的な学校向けテキストを用いての文法訳読の練習」を行う。（91頁）そして、その文法の規範となるものが、リリーのラテン文法であった。ラテン語と英語の文法を多くの生徒に一律に理解させ、身につけさせるためには、すでに学校で学ばれていたリリーの文法を用いることが最良の方法であると考えられたためである。模範となる英文の教材として、よく知られるラテン文学の英訳が用いられたのも、それと同じ理由からである。そのうえで、ブリンズリーは、単に英語に置きかえることに満足することなく、語や句の美しさを探求することを求めている。

ラテン語の詩も、散文と同様に書けるようになるという。そのための方法が詩句と文体の徹底した模倣（imitation）の訓練である。この模倣による表現力の養成こそ、ラテン語作文の基本的な指導法だったのである。[13]たとえば、オウィディウスの詩を文法的にまず散文のかたちで英訳し、次に韻文に訳す。それから、ラテン語訳を試み、それが原詩にどれだけ忠実であるかを見る。（第14章）この際、英語はラテン語習得のための手段である。しかし同時に、ラテン文学の優れた表現を英語に直すことで、英語自体の表現力を陶冶することができるのである。アスカムと、その教授法の信奉者であるブリンズリーによって、ラテン語の文法訳読法は、それ以降のラテン語教育の模範となると同時に、中等英語教育の基礎ともなったのである。

『ルードゥス・リテラリウス』はラテン語を学ぶことに慣れている生徒たちに、ラテン文法を応用して英文法を教えるためのものであった。その意味で、これは英語がまだラテン語から完全に独立した教科となる以前のものであると言える。しかし、そのうえでなお、同書が英語教育の歴史において特筆すべきものであるのは、英語の文法的な知識を身につけることが重要であることを訴え、ラテン語教育と並行して進める文法訳読という英語教授法を提示していることである。英語が多くのグラマー・スクールで学ばれるようになるのは17世紀半ば頃であるが、ブリ

ンズリーはそれに先駆けて、世紀初頭に母語教育の重要性を訴え、次のように論じている。

> But to tell you what I thinke, whererin there seemes unto mee, to bee a verie maine want in all our Grammar schooles generally, or in the most of them, whereof I have heard som great learned men to complain; That there is no care had in respect, to train up schollars so, as they may be able to expresse their minds purely and readily in our owne tongue, and to increase in the practice of it, as well as in the Latine or Greeke; whereas our chiefe indevour should bee for it, and that for these reasons. 1. Because that language which all sorts and conditions of men amongst us are to have most use of, both in speech & writing, is our owne native tongue. 2. The purity and elegancie of our own language is to be esteemed a chiefe part of the honour of our nation: which we all ought to advance as much as in us lieth. As when Greece and Rome and other nations have most florished, their languages also have been most pure: and from those times of Greece & Rome, wee fetch our chiefest patterns, for the learning of their tongues. 3. Because of those which are for a time trained up in schooles, there are very fewe which proceede in learning, in comparison of them that follow other callings. (pp. 21–22)

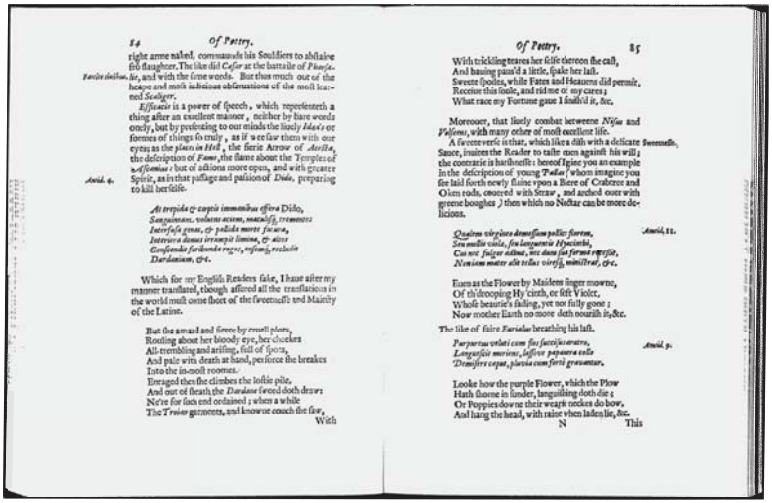
ブリンズリーはここで英語教育が必要な理由を三つにまとめている。すなわち、英語がどの階層の国民も用いる母語であること、ギリシャ語やラテン語の洗練がギリシャやローマの繁栄の象徴であるのと同様に、英語の純正さと美しさこそがイギリスの誉れであること、グラマー・スクールの生徒が、職に就いた若者に比べて学力において必ずしも秀でているとは言えないのは嘆かわしいことであること。

それでは、ブリンズリーが期待する母語の運用能力はどの程度のものであったのだろうか。彼は、英語の読み書きの基礎はグラマー・スクール入学以前に習得されるべきであるとしていた。すなわち、英語の基礎力は、初等教育において十分につけられるべきであるということである。

「英語が読めるようになるまでは、グラマー・スクールに入学させるべきではない。具体的には、新約聖書が完璧に読め、語形変化を身につけているか学び始めていることが必要である」（13頁）と述べている。英語が「読める」ことがグラマー・スクールの入学資格であることは、実際に当時の学則などにも謳われていた。たとえばサリーのセント・メアリー・オーヴァリー校の学則では、英語とラテン語が完璧に「読める」ことが入学条件とされていた。[14]『ルードゥス・リテラリウス』が求める英語力は、したがって、それよりも高い英語力、すなわち、ラテン語テキストの文法説明、解釈、英訳を行うのに十分足りるほどのものである。英語教育の意義は古典語の習得との関りにおいて語られており、教授法はあくまでもラテン文法のそれから派生したものであった。読まれるべきテキストもラテン文学とその英訳および聖書であった。しかし、重要なのは、英語それ自体を古典語と同等に価値のあるもの、あるいは社会的な有用性のあるものとして尊重し、古典語と並行して学ばれるべきとする認識が明らかに見られる点である。

III

ブリンズリーに続いて、17世紀前半には、ほかにもグラマー・スクールにおける英語教育の必要を訴えた者たちがあった。『完璧なジェントルマン』（1622）[15]の著者ヘンリー・ピーチャムもその一人である。ジェントルマンにふさわしい教養として、ラテン文学とともに英文学を読むことが必須であるとした。ピーチャムは古典文学を修めた作家で、ノーフォクのウィモンダムで教師も務めた。英文学の大作家たちの作品を学ぶことで「母語を正しく、表現力豊かに話し、書く」（52頁）力を身につけずして、いかなるジェントルマン教育も完成しないと言う。「詩について」の章で著者が読むべきものとして挙げ、解説するのは、聖書の詩篇、英語の対訳を付したウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、ホメロス、エウリピデスなどの古典詩、およびトマス・モア、チョーサー、ジョン・ガウアー、ジョン・リドゲイトなどの英詩である。フィリップ・シドニー、エドワード・ダイヤー、スペンサーなどの名も挙げられている。英文学を教材とする英語教育の提案としては最初期のものであり、特筆に値する。



84 Of Poetry.

right arme naked. commaunds his Souldiers to abstaine fro slaughter. The like did *Cæsar* at the battaile of *Pharsa-*
Fecit thilus. *lia*, and with the same words. But thus much out of the heapes and most ridiculous obseruations of the most learned *Scaliger*.

Efficacie is a power of speech, which representeth a thing after an excellent manner, neither by bare words onely, but by presenting to our minds the liuely *Idea's* or formes of things so truly, as if we saw them with our eyes: as the *place in Hell*, the fierie Arrow of *Acestes*, the description of *Fame*, the plaint about the Temples of *Aeneas*: but of actions more open, and with greater
Aneid. 4. Spirit, as in that passage and passion of *Dido*, preparing to kill herselfe.

At trepida & cœptis immanibus effera Dido,
Sanguineam volutat aciem, maculisq; trementes
Interfusa genas, & pallida morte futura,
Interiora domus irrumpit limina, & altos
Conscendit furibunda rogos, ensemq; recludit
Dardanium, &c.

Which for my English Readers sake, I haue after my manner translated, though affaird all the translations in the world must come short of the sweetnesse and Maiesty of the Latine.

But the amazed and fierce by reason plaine,
Rolling about her bloody eye, her cheeker
All-trembling and ariffing, full of spots,
And pale with death at hand, perforce the breakes
Into the in-most roomes.
Enraged then she climbes the lofftie pile,
And out of sheath the *Dardane* sword doth drawe
Ne're for such end ordained; when a while
The *Troian* garments, and know ye coach the foe,
With

Of Poetry. 85

With trickling teares her fifte thereon she cast,
And hauing paus'd a little, spake her last.
Sweete Gooddes, while Fates and Heauens did permit,
Receiue this soule, and rid me of my cares;
What race my Fortune gaue I fulfill it, &c.

Moreouer, that lieely combat betweene *Nisus* and *Euryalus*, with many other of most excellent life.

A sweete verse is that, which like a dish with a delicate Sweetnesse.
Sauce, inuites the Reader to taste men against his will; the contraire is hardnesse: hereof Spine you an example In the description of young *Tadus* whom imagine you fire laid forth newly slaine vpon a Biere of Crabtree and Olen rods, couered with Straw, and arched ouer with greene boughes; then which no Nektar can be more delicious.

Qualem virginis demessam pollice florem, *Aneid. 11.*
Seu mollis violæ, seu languentis Hyacinthi,
Cui nec fulgor adest, nec dum sua forma recessit,
Nec iam mater alit tellus virosq; ministrat, &c.

Euen as the Flower by Maidens finger mowne,
Of th'drooping Hy'cinth, or soft Violet,
Whose beautie's fading, yet not fully gone;
Now mother Earth no more doth nourish it, &c.

The like of faire *Euryalus* breathing his last.

Purpureus velut cum flos succisus aratro, *Aneid. 9.*
Languescit moriens, lassoue papauera collo
Demissere caput, pluuia cum forte grauantur.

Looke how the purple Flower, which the Plow
Hath thorne in sunder, languishing doth die;
Or Poppies downe their weary neckes do bow,
And hang the head, with raine vnen laden lie, &c.

ヘンリー・ピーチャム『完璧なジェントルマン』（1622）84－85頁

ミドルセックスで私立学校の教師もしたジョシュア・プールの『イングリッシュ・アクシデンス』（1646）[16]は、ブリンズリーの次世代の著者が英文法教育の理念と方法を示したものとして重要である。しかし、プールも、母語教育の必要性をはっきりと認識しながらも、ブリンズリーと同じように、それがグラマー・スクールの終極的な使命であるラテン語教育の助けとなるという考えにかわりはなかった。やはりラテン語と英語の並行的な習得が推奨されているのである。プールの『イングリッシュ・パーナサス』（1657）[17]と題された600ページの大冊は、押韻辞典、形容語句集、そして英文学および古典文学などの英訳の抜粋集という三つの部分で構成されている。抜粋集にはウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、そしてアリオストなどの英訳、シェイクスピア、ドライデン、スペンサー、ミルトンなどの英文学作品が見られる。勃興目覚しい英文学もまた、古典文学に劣らず修辞法の宝庫であるとする認識を示したものである。しかし、アンソロジーというより、さまざまな英語表現を学ぶための素材集とも言える同書の目的は、生徒に詩を読ませることより、むしろ詩を模倣させ、書かせることにあった。[18]生徒は、ラテン文学の英訳を模倣することで英語表現を学び、それを再びラテン語に訳すことでラテン語作文の練習を行う。英詩だけでなく、ラ

テン詩の英訳を用いて英語表現を模倣させるこの指導法は、ラテン語文法訳読法の伝統にのっとったものである。プールは、まさしくラテン語・ラテン文学教育から英語・英文学教育が自立してくる時期の語学教育者であった。

これらの論者に共通しているのは、英語の社会的有用性を認識しながらも、中等英語教育の必要を、それ自体において主張しているのではなく、いずれも、それがラテン文学をはじめとする古典文学の教養を身につけるための前提、あるいはその補足として必要であるとしている点である。たしかにブリンズリーは社会で役立つ英語の表現力を身につけさせることの重要性を訴え、ピーチャムはジェントルマンに欠かすことのできない教養としての英文学の価値を説く。これらの点では、二人の主張は教科としての英語と英文学の来るべき成立を予見させるものである。しかし、ラテン語の文法訳読を中心とするこの時代の英語と英文学の教授法は、あくまでもラテン語とラテン文学のそれから派生したもの、あるいはその応用であった。

IV

グラマー・スクールにおける初期の英語教授法の基本は、ラテン文法を十分に習得させ、ラテン語を英語に訳読させるというものであった。ラテン語の散文や韻文を理解し、文法的に分析し、それを英訳することで、おのずと英語の表現力を養うことができるという考え方である。母語教育の必要性が認識され始めた時期にあっても、グラマー・スクールの英語教育は、教師が熟知するラテン文法を応用したものであった。

しかしこれまで見たように、17世紀前半のグラマー・スクールの英語の教科書や指導書には、明らかに母語教育の必要性の認識が認められる。ラテン語教育の重要性と英語の効果的な習得法が、あるいは母語教育の重要性とラテン語の効果的な習得法が、常に何らかのかたちで結び付けられているのである。この時期に、ラテン語をはじめとする古典語が独占していたグラマー・スクールのカリキュラムに、教科としての英語が加えられてゆく何らかの契機があったと考えることができよう。

初期の中等英語教科書には、母語固有の特質を認識し、そこに価値を見出すことの必要を訴える姿勢がしばしば認められる。たとえば、本稿

冒頭で見たキケロ書簡集訳者の「英語に固有の、適切で美しい表現」という言葉は、ブリンズリーの「私たち自身の言語の純正さと美しさ」という言葉と呼応するものであろう。ブリンズリーはII節で紹介したように、母語の純正さと美しさは、「わが国の栄誉の主たる要素として尊重されるべきである」と書いている。ラテン語やギリシャ語の優秀性とローマやギリシャの古典国家としての威信とが対応するように、英語の美質と近代国家としてのイギリスの優等性が対応するという言説になっている。『ルードゥス・リテラリウス』は、扉のページにあるように、「若き教師や学生等の勉学のために」、また「教会と国家（Commonwealth）のために」著されたものであった。英語の教育は、若い者たちに宗教的および世俗的教養を与えるものであり、国民の文化的統合の基礎となるものとして捉えられているのである。また、ジェントルマン教育を完成させるものとしての英文学というピーチャムの考え方の基礎にも、英語というヴァナキュラーな言語に、社会的、あるいは政治的な価値を付与するという意志が表れていると言える。英語・英文学は社会で指導的立場に立つ者たちに欠かせない教養となっているのである。

すでに16世紀末までに、英語教育の基礎となる綴字法や英文法は飛躍的な発展を遂げていた。17世紀には、ロバート・コードリーの『アルファベット順難解語集』（1604）を皮切りに、本格的な英語辞書が出版されるようになる。綴字法の確立、英文法の規則化、そして辞書の編纂が、それまで社会のなかで圧倒的な有用性と価値を有していたラテン語やフランス語などに劣らぬ優れた言語として母語を認識し、その知識を拡大するために必須のものであると考えられた。たとえば、『簡約英文法』（1586）の著者ウィリアム・ブロカーは、英文法の規則化がなされない限り、英語は野蛮な、古典語に比べて劣った言語であり続けると主張した。英文法は、英語だけではなく、他の言語の習得のためにも、また外国人が英語を学ぶためにも有用な、「イギリス国家にとっての大きな利便」であると言う。また、ポール・グリーヴズは『英文法』（1594）を英語ではなく、ラテン語で書いている。その理由を、英語が文法書を著す言語としてふさわしくないからではなく、他のどの言語よりも秀でた言語である英語の文法書を、外国人にこそ使って欲しいからであると述べた。[19)]

初期の中等英語教育は、同時期の英語学に見られた国家の言語として

の英語尊重の姿勢から影響を受けて形成された面を持つ。しかし、ラテン語教育を中心とする伝統的カリキュラムの大きな変容をともなうグラマー・スクールにおける英語教育の導入は、それ自体が、母語についての認識を広く促す契機となったとも言える。それは、ラテン語とは違う社会的な機能を持ったジェントルマンの言語としての母語についての認識であった。生徒にラテン語などの古典語だけではなく、国民共通の「資産」である母語の高度な運用能力を身につけさせることを使命とし始めたグラマー・スクールの教育が、母語についての新たな認識の枠組を示したとも言えるのである。

V

ブリンズリーの『ルードゥス・リテラリウス』をはじめとする17世紀初めの英語教科書で説かれ推奨されたラテン語文法訳読法は、古典語教育から派生した母語の教授法であった。それは、ラテン語の表現を正確に理解し、模倣することが、母語の高度な運用能力の獲得に資するという考えに基づくものであった。それがそれ以後の英語の基本的な教授法となったのである。この教授法の考察からは、イギリスにおける英語教育の成り立ちとラテン語教育の伝統とは、簡潔にまとめれば次の三つの点において不可分であったことがよくわかる。まず、英語の知識がラテン語習得の基礎として重要であるとする英語教育の当初の目的意識において、もう一つは、初期の英文法の教育が、ラテン文学を教材とし、ラテン文法を応用したものであったことによる教授法において、第三には、母語への関心が、ラテン語に並ぶ優秀性を持った言語の文法の確立を目指す同時代の英語学を反映、ないしは形成するものであったことにおいてである。これらに共通するのは、いずれもラテン語との比較対照の視点によって母語とその教育が捉えられていることである。さらに、この時期の母語教育は、興隆する国民文学としての英文学の教育内容もおのずから含んでいた。英文学作品の優れた表現を理解し模倣することによって、生徒に模範的な母語表現を身につけさせることがジェントルマン教育の目標とされたのである。英語教育の必要性の認識は、英語学の発展と連動したものであったが、同時に、英文学の古典の形成とも不可分のものであった。英文学の教育もまた、ラテン語修辞法とラテン文学

教育の教授法から派生し、それを応用しつつ試みられるようになるのである。

＊　本稿は成城大学特別研究助成に基づく研究成果の一部である。

注）

1）*Certaine Epistles of Tully Verbally Translated : Together with a Short Treatise : Containing an Order of Instructing Youth in Grammar, and withal the Use and Benefite of Verball Translations* (1611). 引用を含め、Richard Foster Jones, *The Triumph of the English Language : A Survey of Opinions Concerning the Vernacular from the Introduction of Printing to the Restoration* (Stanford, 1953), p. 281を参照。

2）Foster Watson, *The Beginnings of the Teaching of Modern Subjects in England* (London, 1909), p. 43を参照。

3）リチャード・S・トンプスンが行ったイングランドおよびウェールズのグラマー・スクールについての調査によれば、16世紀の新設校のうち、古典語教育のみを行うのが155、英語教育も行うのが12であったのに対し、17世紀の新設校では65に対し42、18世紀の新設校では4に対し29であった。Richard S. Tompson, *Classics or Charity? : The Dilemma of the 18th-Century Grammar School* (Manchester, 1971), p. 58を参照。

4）John Brinsley, *Ludus Literarius ; or, The Grammar Schoole* (London, 1612 ; repr. Menston, 1968).

5）17世紀の初等英語教育については別稿で論じる。なお、イギリスで学校教育が初等、中等、高等の3つの段階に区分されるのは19世紀半ばであるが、本稿ではそれ以前についても便宜的にこの区分によって論じた。

6）この節中のラテン語教育の略史は、Foster Watson, *The English Grammar Schools to 1660 : Their Curriculum and Practice* (London, 1908 ; repr. 1968), chap. XIV および Jones, pp. 278–79を参照。

7）*A Shorte Introduction of Grammar*. 同書については Scolar Press 版 (Menston, 1970) の Note などを参照。

8）M. L. Clarke, *Classic Education in Britain 1500–1900* (Cambridge, 1959), pp. 7–8を参照。

9）Roger Ascham, *The Scholemaster ; or, Plaine and Perfite Way of Teachyng Children* (London, 1570 ; repr. Bristol, 1994). Watson, *English Grammar Schools*, p. 362を参照。

10）Watson, *Beginnings*, p. 16.

11）Jones, p. 281を参照。

12）Ian Michael, *The Teaching of English : From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987), p. 273を参照。

13）Clarke, p. 35 ; D. J. Palmer, *The Rise of English Studies* (London, 1965), p.

3を参照。

14） Nicholas Carlisle, *A Concise Description of the Endowed Grammar Schools in England and Wales*, 2 vols (London, 1818), II, 584.

15） Henry Peacham, *The Compleate Gentleman* (London, 1622; repr. New York, 1968).

16） Joshua Poole, *The English Accidence* (London, 1646; repr. Menston, 1969).

17） Poole, *The English Parnassus; or, A Helpe to English Poesie* (London, 1657; repr. Menston, 1972).

18） Michael, pp. 151–52を参照。なお、修辞学を応用したこの時期の英文学教育については別稿で論じる。

19） Jones, pp. 272–77, 283–87を参照。ブロカーからの引用は、William Bullokar, *Bullokar's Booke at Large, for the Amendment of Orthographie for English Speech* (London, 1580)の副題中の文言より。